2024年度 大学入学共通テストの出題傾向と今後の入試動向

学校法人 河合塾　教育企画開発部 地歴・公民科

1 はじめに

2024年度大学入学共通テスト（以下､共通テスト）は、大学入試センター試験の後継として４年目の実施となった。志願者数は491,914人であり、昨年度より20,667人減少し、2019年度より減少し続けている。科目別受験者（本試験）は、地理Ｂ136,948人、世界史Ｂ75,866人、日本史Ｂ131,309人であった。河合塾共通テストリサーチによる各科目の得点分布は図１のとおりである。

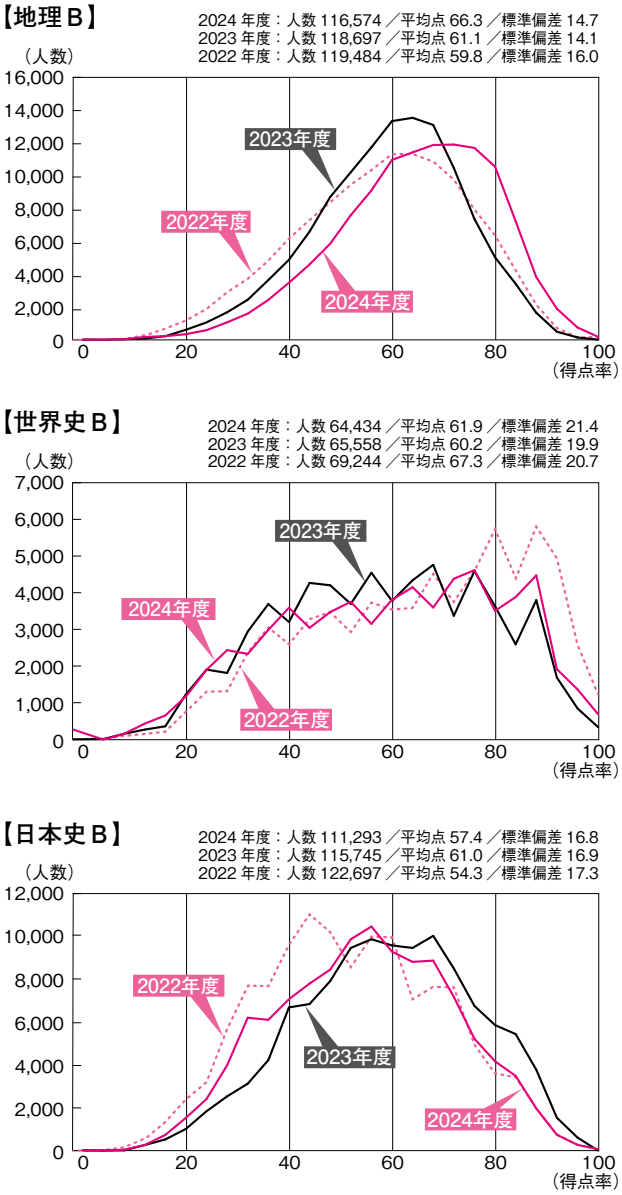

図１ 共通テストの年度別得点分布
（河合塾共通テストリサーチによる）

2 2024年度共通テストの出題傾向

地理Ｂは、共通テストの過去３か年で定着しつつあった、複数の資料を参照させる組み合わせ形式の問題が減少し、３つの指標や国・地域の組み合わせを選ぶ単純な形式の問題が中心となったため、やや易化した。新傾向の形式の問題は見られなかった。すべての問題に図か表が使用されており、思考力とともに短時間に判断する情報処理能力が試されている。出題分野については大きな変化はなく、ほぼ全分野（系統地理的考察分野、地誌的考察分野、地図と地理的技能の分野）からまんべんなく出題されている。

世界史Ｂは、すべての大問に資料（史料文・グラフ・図版・地図）の読み取り問題があったが、話の方向性を見極めなくてはならない会話文が昨年より大幅に減少し、読み取りやすい問題となったことなどからやや易化した。問題形式については昨年同様、資料や会話文など複数の材料から必要な情報を読み取り、総合的に判断する問題が多い。第２問では共通テスト本試験では初めて連動式の問題が出題された。問４で選んだ解答によって問５の解答が変わるため、それぞれの選択肢との関連を考察する必要がある。また、地域については欧米史が多く出題され、分野では政治史が多いが、社会経済史・文化史も組み込まれて出題されている。時代については、昨年同様に前近代史からの出題が多いが、第二次世界大戦後からも３問出題された。

日本史Ｂは、史料の読解問題がいっそう増加したうえ、複雑な組み合わせの設問も出題されており、やや難化した。第３問と第６問で、３つの史料とその内容について述べた２つの文章との組み合わせを選択させる新形式の問題が出題された。また、第１問を除いて高校生の会話や学習・探究活動が素材とされ、昨年に引き続き

高校生の「主体的な学び」をふまえた場面設定がなされている。個々の設問では、史料・図版・統計など多様な資料を用いた出題が見られたが、教科書などで扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業などで学んだ知識を関連づけることで正解できる問題となっている。全体としては、受験生の歴史事象に対する理解の質や思考力・判断力を幅広く問う配慮がなされている。分野については、外交・文化からの出題が増加し、政治からの出題が減少した。時代では、高度成長終焉後が昨年に引き続き扱われなかった。

3 今後の入試の動向

◆新課程における共通テスト

地理では、新課程の「地理総合」と『地理総合，地理探究』は、旧課程の地理Ａと地理Ｂにほぼ対応している。地理総合で扱われている「地図と地理情報システム」そのものをテーマとした問題はこれまで地理Ａだけで出題されていたが、これからは『地理総合，地理探究』でも出題されると思われる。共通テストに移行してからの４年間で全体の傾向に大きな変化は見られず、新課程に移行しても同様の傾向が続くと考えられる。共通テストでは各設問に図表が用いられるようになっており、基礎知識に加え問題文の読解や図表を読み取る力が求められている。

歴史では、新課程の「歴史総合」は 18 世紀以降の日本を含む世界の歴史を扱う。普段の学習を進める際に、18 世紀以降については同時期の日本や世界がどのような状態であったか確認したり、また世界の動きが日本にどのような影響を与えていたか確認したりしておきたい。

世界史は、共通テストになって以降、用語そのものを問うのではなく、できごとの内容や因果関係、背景、影響などを問う出題が増加している。できごとの「タテのつながり」「ヨコのつながり」を意識した学習を心がけるとよいだろう。2024 年度の本試験は資料や資料の説明文など複数の材料から必要な情報を読み取り、習得した知識と組み合わせながら総合的に判断する問題が多く見られたが、これは 2022 年 11 月に公表された令和７年度大学入学共通テスト『歴史総合，世界史探究』の試作問題と類似する方向性であり、こうした出題は今後も継続すると予想される。

日本史は、史料・図版・略系図・統計表など、多様な資料を利用しての出題は継続されるだろう。2024 年度の本試験でも、できごとの因果関係を正しく理解する力、歴史名辞の意味を正確に理解する力、史料や統計表などの資料を読解できる力などが求められている。また、高校生の会話や学習・探究活動が引き続き素材として扱われており、こうした場面設定の読解が必要となる問題は今後も出題されると思われる。

なお、新課程における共通テストで２科目を選択する場合、同時選択が不可能な組み合わせがあるので改めて確認しておきたい（表１）。

表１　２科目を選択する場合の組み合わせ一覧表

（解答順は順不同）		(b)					(a)「地理総合／歴史総合／公共」（3つのうち2つを解答）		
		『地理総合，地理探究』	『歴史総合，日本史探究』	『歴史総合，世界史探究』	『公共，倫理』	『公共，政治・経済』	「地理総合」と「歴史総合」	「地理総合」と「公共」	「歴史総合」と「公共」
(b)	『地理総合，地理探究』		○	○	○	○	×	×	○
	『歴史総合，日本史探究』	○		○	○	○	×	○	×
	『歴史総合，世界史探究』	○	○		○	○	×	○	×
	『公共，倫理』	○	○	○		×	○	×	×
	『公共，政治・経済』	○	○	○	×		○	×	×

○は選択可能な組み合わせ、×は選択不可能な組み合わせ
〈大学入試センター「令和７年度大学入学共通テストについての説明資料（令和５年７月掲載）」p.20 より作成〉

◆国公立大二次試験・私立大入試

国公立大学や私立大学の大学独自試験の出題範囲については、「総合科目」＋「探究科目」５単位分の出題範囲とする大学と、「探究科目」のみ３単位分の出題範囲とする大学に二分されている。

同じ大学であっても、地理では出題範囲に「地理探究」の基礎となる「地理総合」を含む一方、世界史および日本史では、日本と世界の近現代を扱うことになる「歴史総合」は含まないとする大学も多い。私立大学では今年に入って出題範囲の変更・補足が発表されているケースも散見されるため、最新の情報を確認しておきたい。

新課程入試元年である 2025 年度入試では各大学で旧課程生への配慮が公表されているものの、2026 年度以降の大学独自試験において、近現代における日本と世界の相互関連の理解を問う「歴史総合」がどの程度出題されるのか、注視していく必要がある。

出題傾向としては、国公立大学の二次試験では、ほとんどの大学で論述形式が採用されており、これまでも思考力・判断力を要する出題がなされているため、現在の出題傾向と大きく変わらない可能性が高い。一方、知識を中心に問う傾向の強い私立大入試では、資料を分析・考察しながら、課題解決の力をはかったり、因果関係や時代概観を把握しているかを問うたりする問題が増加する可能性がある。